

講演．栗林 知絵子さん(認定 NPO 法人豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク 理事長)



豊島子ども WAKUWAKU ネットワーク(以下、WAKUWAKU)の栗林と申します。池袋で、様々な子どもの居場所づくりをしている団体です。まず、団体紹介をします。

私たちの団体のビジョンは「おせっかいの輪を広げる」。なかなか地域の子どもの方たちには紹介しにくいんですけども、どこか居場所につながって、仲間ができると、意外とみんな声をかけられる関係になっていくのです。そういう「おせっかいの輪」を広げることによって、互いに無関心ではない、孤立のない地域を作っていこうということで活動しています。団体が始まった時から、子どもの貧困という見えない困難を抱えた子どもたちとどうにかつながって、その子たちの人生を少しでも明るくしていきたい。そんな思いがあります。

私たちの団体にはボランティアが300名ぐらいいます。中学校が8校ある地域ですけれども、ボランティアの方たちが私たちと対等なんです。「別に、WAKUWAKU のためにやっているわけじゃない。地域の子どものために一緒にやっているのよ」という意識の方たちと共に活動を作れていることが、私はとても嬉しい、素敵なおところだと思っています。

これまでいろんな居場所づくりをしてきたんですけれども、そもそもなんでこんな活動したかということに触れたいと思います。

私の息子は、いま30歳と27歳の男の子が2人います。私は、結構自然豊かな人の繋がりも豊かな、昭和の時代に子ども時代を過ごしました。ところが、私は池袋という繁華街に近いところに嫁いで、そこで子どもを産みました。「この子どもたちは、どこで遊ぶだろう？ 私みたいに冒険できるのだろうか。」というのが、私の課題になりました。第2の課題として、次男がアレルギーを持って生まれてきました。母乳で育てましたが、初めて食べた卵ボーロを口にしたら、目が腫れ顔もパンパンに腫れて息ができなくなって、病院に連れてきました。

病院で「あなたのお子さんは乳製品と卵と小麦の劇症型アレルギーなので、この本を読んでください」と手渡されました。よく考えたら、卵ボーロの全ての材料が劇症型アレルギー反応を起こしたわけです。つまり、うちの子は、パスタのパンも「うどん」も食べられない。米しか食べられないのです。この米を3食どうやったら美味しく食べて成長できるだろうか不安になりました。食べ物について調べてみようというところから、誰かに言われるのではなく自分で考えて、納得した食事を提供したり、納得した遊びを自分で行ったり、というような子育てになりました。おかげで私の子育ては、午前中から屋外で遊び、お腹がペコペコになると、外でおにぎりを食べて、また遊んで、くたくたになって家に帰って、ご飯を食べて寝るという毎日でした。

2004年に豊島区が、10年後に小学校が建つまでの10年間、空き地を活用としたプレーパークを立ち上げたのです。そこで、私はこんな近くに思い切り遊べる場所ができるということで、プレーパークの活動に参画しました。当時、うちの子は小学校一年生と幼稚園です。そのプレーパークで、いろんな子どもと過ごすんですけれども、10年やっていく中で、3家庭ぐらいいすかね。

家の冷蔵庫がいつも空っぽでお腹を空かしている子、「引っ越してくる前は車の中で生活していたんだよ」と言ってくる子。昨日も「お母さんが酔っ払って、自分がゲームをしていたら、俺のゲームに包丁を突き刺した跡だよ」と言って見せられたり。目の前の子どもの声から、私の子育てとは違う環境で育っている子がこの町にいることに気づきました。

自分の子どもだけ幸せになる？ そんな地域はないよね。ここにいる目の前の一人一人が笑顔で、みんなに大切にされる。だから、うちの子も幸せなんじゃないかと思う中、自分の子どもの周りには、公園にいる子どもたちにも、様々なおせっかいをするようになりました。

そうこうしているうち、2011年、中学校3年生の男の子から「俺高校に行けないかもしれない」と言われたのです。その頃うちの息子は、高校1年生と中学校2年生に成長していました。自分の子ど

もと同じ年代の中3の子から、しかも夏休みに「俺高校に行けないかもしれない。誰にも相談できなかった。」と聞いて、すごくショックでした。その子に、勉強を本当にしたいんだったら、みんなで教えるから勉強しようと言い、プレーパークにいるボランティア学生とともに、学びのサポートを始めました。

その子は無事に都立高校に合格して、いまは正社員として仕事をして一人暮らしをしています。その子の勉強をサポートする中で見てきた課題として、その子のお母さんがDVで家を出て、その時から何度も転校を繰り返していたそうです。彼は「転校するたびに、どんどん勉強がわからなくなって、分からないというのを誰に言ってもいいか分からなかった」と、言ったのです。プレーパークで、こうやって繋がれて良かったなと思いました。プレーパークは遊び場でもあるんだけど、誰でも来ることができ、土日曜日はいつでもやっている居場所なんだと認識するようになりました。

彼は、小学校の小数点やの足し算や、分数の意味もわからないまま中3になっていました。私たちには中々見えないんだけど、この国には「子どもの貧困」がある。2012年頃にテレビで「子どもの相対的貧困率、7人に1人」という報道を目にしたのです。目の前にたまたまプレーパークで出会う子どもは、本当に年に数回一人いるのだけでも、この街にはそうした『環境に左右されながら暮らしている子がいるとしたら、いろんなお節介をする』そんな緩やかな繋がりを作ろうよ、ということで、できたのがこのネットワークです。

そういう中で、小学校の時から誰にも勉強が分からないと言えないまま、お母さんも余裕がないまま、中3になってしまうのではなく、早期に地域で勉強をちょっとサポートできたら、その後の学力も進学先も変えることができるかもしれないと思い、学習支援(WAKUWAKU勉強会)を始めました。最初に高校入学をサポートした子は、一人親家庭でお母さんがダブルワーク。一日500円もらって、コンビニご飯を一人で食べていたそうです。

子どもには、あったかい手作りのご飯を、みんなでわいわい食べると楽しいという経験をして成長してほしいね。ということで、子ども食堂を始めました。子どもたちの遊び、学び、暮らし、これ全ては、子どもの権利です。この権利は、親でなくても周囲の大人皆で守っていきたいと思います。

子ども食堂には親御さんもやってきます。そうすると、今度はママやパパの声も聞こえてくるわけです。ひとり親さんは、平日仕事をしている方が多いです。平日、豊島区には子育て広場を開催していますが、全て平日の午前中に開いているのですね。そこにはひとり親さんは行けないです。子ども食堂だったら、保育園でピックアップした後、ここに来て、色んな品数のご飯が食べられる。お母さんもほっとする中、親御さんの話も聞くようになりました。子どもが孤立しないためには、親の孤立予防が大事だと思いホームスタートが始まりました。子育て中の乳幼児親子を訪問し、親の傾聴や子育ての協働を通じて孤立を予防する活動です。

子ども食堂を始めて間もない頃、いつも食堂に来ていた小6の子が一時保護されました。お母さんが入院されたんです。その後まもなく、そのお母さんは亡くなりまして、一時保護された子が一日だけ、お葬式で地域に戻ってきたのです。その時に話を聞いたら「本当は池袋小学校に行きたい。Mちゃん、元気になっているかな？ 修学旅行に行きたかった。卒業したかった。この街に住みたかった」と言うのです。

そこで、私たちはせめて小学校を卒業するまでは、この地域で私たちが預け合いながら卒業させられないものかしらということで、児童相談所にも掛け合いましたが、それは叶いませんでした。そういう中、子どもが安心しておばあちゃん家のように泊まれる場所が地域にあれば、彼女はせめて小6を卒業するまで、ここに住めたのに・・・というところから、WAKUWAKU ホームという子どもが宿泊できる居場所を2017年に始めました。

こうやって色々な居場所ができると、ボランティアさんも関心がある居場所でボランティアに参加してつながり、子どももボランティアさん同志も互いに名前を呼び合う関係になります。名前を呼び合う関係の人が困っていたら、みんな「ほっとかない」おせっかいの循環を作っているという団体です。いま、色々説明しましたが、私たちの活動は全て知っている方が、その声を聞いて、その困難や理不尽な状況を知って、心が動いて、居場所を作ってきました。「こんなのがあったら、救われたかもしれないよね」というのが、私たちの原動力です。

具体的に、居場所について紹介します。プレーパークは2004年から始まって、10年後にそこに小学校ができちゃいました。区の事業計画では2013年でプレーパークを中止にする予定でした。しかし、子どもの貧困をなくしたいと緩やかにつながったネットワークの仲間が、いろんな形で行政に呼びかけて、行政はその後空き家三軒を購入して、新たな場所で常設プレーパークが誕生しました。

その時から、私たちは区から委託という形で、子どもたちが「面白そう。やってみたい。」を実現できる居場所をやっています。コロナ禍の時、学校もいろんな施設も居場所ができませんでしたが、プレーパークだけは開催しました。

このスライドの写真は日暮れに近いのですが、みんなで穴を掘って慌てて穴を埋めている様子です。ここには評価も何もありません。面白そうと思っていること、やりたいことができる。それを周囲は否定しないで応援しています。こういう環境は、本当に守っていく大人がいないと、どんどんなくなっていく。このプレーパークの活動は WAKUWAKU のベースとなっています。



とにかく、子どもも大人もやってみたいことは、みんなで応援してやってみようよ！という活動なのですが、そうは言ってもプレーパークは豊島区に1箇所しかありません。豊島区のいろんなところに子どもがいて、子どもたちがいろんな挑戦をしてほしいので、公園にダンボールや遊び道具を持ち込んで、子どもたちが思い思いに自分に遊ぶことができる出張プレーパークもやっています。

ここからは、プレーパークで出会った子どもの声から生まれた子ども食堂についてもご紹介します。先ほど言ったように、私たち子ども食堂は最初要町という町で始めたのです。そこは、一人暮らしの定年を迎えた男性が、「一人だとご飯を食べる気もしない。新聞見る気もテレビを見る気もしない」という声を聞いたところから、そのお宅で子ども食堂がスタートしました。

2箇所目として始めた子ども食堂は、池袋本町プレーパークのすぐ近くのほんちょこ食堂です。ここはネグレクト気味の幼児が、子どもだけでいつも遊びに来るのです。この子、虫歯だらけだよねというところから、その子に関わりました。その子と関わるうちに、子ども食堂の日はお母さんの許可を得て、子ども食堂に連れていくようになりました。歩いて40分ぐらいかけてプレーパークから子ども食堂まで行っていたのです。それをこのプレーパークの地域の方が目撃したのです。「あなたは、うちの地域の子をどこまで連れていくの？」と問われ、事情を話したところ、この地域でも子ども食堂を始めようということで、ほんちょこ食堂が生まれました。

子ども食堂は、やりたいと思っても場所がないとできないです。ほんちょこ食堂は、むかし高齢者に暮会所として自宅の一室を解放していた地域の方が、この場所だったら貸してもいいよということで、お借りできました。食べた後、遊ぶ場所はないので、その持ち主の方が車をパーキングに入れて、駐車場にブルーシートを敷いて、そこで遊んでいました。

このスライドに出ている子たちは、みんな大人になりました。大人になって、いまは「ちょっと車出して」とか言うと手伝ってくれるし、この地域の大人たちが自分たちのことを本当にこうやって大事にしてくれて、どんな思いでここをやってくれたかっていうこと。今となって分かるっていうことで。この地域は本当にいい地域だということで、いろんなことでお手伝いしてくれているのです。

一方で、子ども食堂をやっている人たちは、みんな凄いネットワークの持ち主です。多分皆さんもそうだと思います。子ども食堂はある意味、借り物競争だと思っています。「場所がない、場所がない」と言っていたら、場所を借りることができました。「鍋がない」ってみんなに言うと、鍋が来たり。そうやって、いろんな人たちの力で、ここは運営しています。

そうこうしているうちに、この地域に特別養護老人ホームができたのです。「ここのスペースを是非使ってください」という施設長から声をかけていただき、今は60名ぐらいの子どもが来る子ども食堂に成長しました。以前の場所は古くて狭かったですが、場所代として3,000円ぐらいお支払いしていたのですが、今の施設は無料で借りています。

コロナの間はお弁当やらパントリーやら、子どもたちとつながり続けましたが、2023年5月いち早く会食に戻しました。このスタッフさんたち、みんな子どもの笑顔に会いたいですよ。お弁当だと、お母さんが取りに来るというケースも多く、やっぱり、子どもとワイワイガヤガヤご飯食べたることができる会食に戻しました。一方、このスライドの写真は、池袋の私が住んでいる繁華街に近いところで始まった子ども食堂です。ここは、すごく小さい軒家を借りてやっています。

私たちの子ども食堂は、全て月に2回しかやっていません。月に2回こうやってご飯を食べて、コロナの間はお弁当やらパントリーもしました。コロナ禍の前のエピソードなのですが、私たちに学習支援とかいろんなところで、誕生日にみんなで寄せ書きをして渡すという習慣があるんですけど、写真に写っているおばあちゃんは90歳の誕生日を迎えました。おばあちゃん、子どもたちからみんなにお祝いされました。91歳のときは、近所の病院に入院されました。痴呆もかなり進んでしまいましたが、このおばあちゃんの入院を支えたのが、実は子ども食堂のスタッフさんでした。先ほど言った「名前を呼び合う関係になったら、困っていたらほっとかないですよ」というのは、こういうことなのかなと思います。この後おばあちゃんは最後に「自宅に帰りたい」と言うので、子ども食堂のボランティアさんたちが「私たちが看るから、自宅に戻してあげましょうよ」と言って、自宅で介護する環境を整えました。

この写真に写っている聴診器をかけている方は地域のお医者さんです。これは先生が「いま死亡を確認しました」と言った直後の写真なのですが、子ども食堂のボランティアさんもみんな、お嬢さんたちも滅茶苦茶いい笑顔だったので、思わず写真を撮っちゃったんです。この日の夕方、子ども食堂に子どもたちがぞろぞろやってきて、おばあちゃんにお別れをしました。いつもやんちゃな中学生も、こうやって涙を拭いている姿を見て、子ども食堂ってたった月に1・2回、ただ手作りの温かいご飯をみんなで食べるだけかもしれないのですが、こういう場が地域にあることによって、地域の絆・縁というものが作られることを、この時すごく感じました。

最初にプレーパークの話をしたのですが、少し前子どもの遊びには三つの「間」が必要だと言われていました。三つの「間」というのは、一緒に遊ぶ「仲間」と「時間」と「空間」がないと、子どもの遊びは成り立たない。いま子どもが遊ぶ環境が減っているという話をよく聞いたのですが、子どもの遊びと同じように、地域で居場所を作るというのは、私たち地域の大人がやってみたいということを実現するのですが、やはり、これも三つの「間」がないと、実現不可能だと思います。一緒にやる仲間と、月に1回でも時間を作ろうとか、場所はどうか、この三つの間がないと、なかなか子ども食堂もできないなと思っています。

しかしコロナの間、15～18時で活動が終了するお弁当配布の子ども食堂を4年間やった後に、19～20時までかかってしまう会食の子ども食堂に戻すのは、ボランティアさんも消極的な子ども食堂が多いのではないかと思います。「この歳で、また会食の子ども食堂に戻るのはきついわ」というボランティアさんも多かったです。では、どうしたら会食の子ども食堂ができるか。今まで自分たちだけでやっていた仕事を細分化して、多くの仲間と居場所を作ったらどうかということで、実現しました。

できないところを、みんなで知恵を集めて、乗り越えていく。これこそが楽しくて、私たちのまちでの自己実現で。そういう私たちが自分自身を肯定できるからこそ、子どもを大切にできるまちになるのかな。そうやって優しい強い街になるのかなと思っています。

今後子ども食堂を始める方、ぜひ自分たちの仲間だけで考えずに、いろんな人に相談して、それも全然違う分野の人に相談して、一緒に連携するということを検討してはいかがでしょうか？

実際に私たち、コロナの後に始まった子ども食堂を紹介します。このスライドに写っているのは、高齢者の配食をやっている高齢者グループ団体です。そして学習サポートを中心に活動している団体と、WAKUWAKU。場所は、特別養護老人ホームのコミュニティスペースを無料で借りています。

この4者が連携協働で、子ども食堂が生まれました。私も、高齢者の配食の方たちと今まで関わる機会なかったのですが、こうやって一緒にご飯を食べることによって、お一人暮らしの方が「いつも一人でご飯食べているのよ。こうやって子どもとご飯を食べると楽しいわね」と仰っています。「子ども食堂だと、親御さんが迎えに来て、親御さんが洗い物やってくれと助かるわ。高齢者の配食は準備のところから片付まで、みんな私たち高齢者がやっているのよ。」というようなお話をしたりしています。

豊島区では子ども食堂は、行政の「子ども若者課」と連携しています。そこで食材費の補助があります。他方で、高齢者の配食活動グループの方たちは、「自立促進課」という高齢者支援の部局と連携しています。こっちはこっちで、いろんな仕組みやサポートがあるのです。活動を協働することで、実は子ども支援の補助金と、ボランティアさんのフレイル予防としての活動でもありますので、この活動への支援両方の支援を受けることができるようになり、私たちも高齢者の支援の仕組みを学ぶことができました。

学習支援は、こんなふうに区民集会室で実施しています。コロナの間集会室を借りられない時は、場所を借りて学習支援は毎週やり続けました。なぜなら、豊島区には外国ルーツの子どもが多いのです。外国ルーツの子たちは、オンラインで勉強をサポートすることはなかなかできません。また、外国ルーツの子は学校がない時、日本語を話す機会もなかったので、対面でやり続けました。

豊島区には、無料学習支援がこれだけあります。これも、約10年間に地域住民が作ってきた学習支援を、社会福祉協議会が事務局を担いネットワーク会議を毎月やっています。団体同士が孤立しない、団体の課題を共有してみんなで考え解決していく、そんなネットワークができています。子ども食堂は、子ども若者課が事務局を担い、やはりネットワーク会議をしています。

WAKUWAKU ホームは「地域にあったらいいよね」で始めましたので、行政の仕組みとかは全く関係なく、毎回助成金を取り続けて開催してきました。最近子ども家庭庁ができ、様々な施策を打っていますので、私たちも行政に提案して、次年度からは運営費の半分ぐらいを豊島区の補助金で担うことができそうです。ここは不登校・ひきこもりの子どもたちもやってきますし、土曜日はこのWAKUWAKU ホームを卒業した子たちが、就職した後に実家のように帰ってくるような場になっています。

私たちが子ども食堂を最初に始める時に、行政にこう言われました「こんな不公平な活動には協力できません」。そして、教育委員会からは「子どもにご飯を食べさせるのは親の仕事ですよ。子ども食堂を地域でやったら親が怠けます。」と言われました。つまり10年前は、子どもは親が育てる。人を頼っちゃいけない。月に1回ご飯を食べる子ども食堂ですら、親が怠けると言われた時代です。そういうところから、どんどん子育てが孤立化していくのだと思います。でも、月に1回でも「こういうのがあるからおいでよ」という場があることによって、孤立しがちな家庭が地域とつながる場になる。そこから、孤立している親御さんの声がキャッチでき、それで必要な支援を作ることにもできる。そして、地域の多文化交流拠点となる。多文化というのは、いろんな国の子どもが豊島区にはいます。

多文化というのは、他にも行政の文化だったり、地域の町会の文化だったり、私たちのような「子どもの権利をすごく尊重したい」という文化だったり、若い共働きの方たちの文化だったり、同じまちでもいろんな考え、いろんな価値観があります。そういう人たちが交流して、お互い名前を呼びあう関係になると互いを尊重し、支え合うまちになるなと思っています。

そして最近つくづく思うのが、フレイル予防・介護予防の場ではないかと思うのですね。というのは、私は民生委員なので、フレイル予防体操というのを月に1回やっています。どんなことをするかというと、地域の方が集まってきて一緒に体操をするのです。その後、地域の講師の方が食べ物の話などいろんな話をして、ちょっとおしゃべりをして帰るという活動です。

子ども食堂で子どもたちの声を聞いて、「ありがとう」と言われて、メニューを考えて料理をして、おしゃべりもして帰る、このフレイル予防。私は断然子ども食堂で、ちょっとボランティアするフレイル予防の方が素敵だし、子どもも大切にされる。子どもの居場所というのは、いろんな効果をうみだす活動だと思います。

今ご説明しました「暮らし、遊び、学び」ですが、地域の方・学生、それぞれが自分の得意なところから居場所に関わります。一緒に活動がゆるくつながっていることによって、学習支援に来たボランティア学生が子ども食堂を立ち上げたり、学習支援のボランティアがプレーパークでアルバイトをしたり、いろんな形で学生そして地域の方も、すごく豊かなコミュニティの中で生活するようになっていきます。

豊島区はコロナの前から「ゆるい」ネットワーク・居場所がたくさんありました。そういう地域だからこそ、コロナで学校が休校になった時、いち早く団体同士が連絡を取って、食料支援を始めました。当時、東京都知事の小池百合子さんから「もう緊急事態宣言なので、活動しないでください」との報道があり、豊島区行政も何もできないという状況だったのです。そういう中で、市民が食料支援をやるのだったら、それを応援するということで豊島区役所の1階をパントリー拠点にして、休校になって困っている子ども達に食料を取りに来てもらう形で、官民連携で食料支援が始まりました。

それ以外に行政ができることとして、学校・教育委員会を通じて、生徒にパントリーをやるというチラシを配布しました。急に学校休校になったのですが、週に1回は登校日があったので、登校日にチラシを生徒に配って、食料支援、孤立をしない、という形を官民が一緒に作ることができました。

豊島区22校小学校があって22拠点にこういう集会室があるのですけども、この集会室で、学校休校の間に、お弁当配布をしました。当時、飲食店も仕事ができなくなりました。ある地域のオーナーさんが「もう従業員がやることなくて。モチベーション下がっちゃうから、子どもたちのお弁当を作るの

で配ってほしい」という提案があり、社員さんが子どものためにお弁当を作って、それを毎日受け取って、区民広場の軒下を借り、キャンピング用のテーブルとかいろんなものを持ち込んで、お弁当配布を各小学校区拠点で、地域の人々に協力を呼びかけてやりました。

さいわい地域の民生委員さんとか、育成委員さんとか、いつも忙しい方たちも、この時は時間がありました。私たちの共通の課題は、地域の子もたちが心配だということです。貧困とか外国とか関係なく、とにかく学校が休校になって「地域の子もたちが元気になっているかしら。大丈夫かしら。」という共通の価値観から、この食料支援に多くの人たちが参画しました。この取り組みが、その後5年間続いていったわけです。どういうふうが続いていったかということ、この地域の方たちが、毎月お米等の困窮家庭の食料支援ボランティアに参画したのです。

こうやって、地域のボランティアさんが約300名に増えていきました。毎月、食料支援を各拠点で開催するわけですが、申し込み時、毎月のように親御さんの困り事をキャッチできました。つまり、困り事が複雑になって、どうにもならなくて相談をするのではなく、ちょっと不安というところで相談を受けることができました。そういう困り事を聞くことによって、地域の皆さんは、さらにほっとけなくなって、どんどんおせっかいの輪が広がっていく。そういう5年間でした。

私たちの地域は「食」も大事なわけけれども、お母さんたちから「子ども服が1年経つとサイズアウトして、毎回買わなきゃいけない。でも生活が苦しくて、洋服を買うのも大変」「絵本って、高いんですね」という声を聞き、一緒に活動している仲間とか企業さんとその声を共有しました。それによって、いま豊島区では企業などいろんなステークホルダーが、子どもが暮らしやすい豊島をみんなで作るということで「としまこども団」という子どもの応援団ができました。

企業さん中心に、自社の社員さんたちの子ども服を持ち寄って、かなり大々的な洋服マーケットを始め、地域の人や企業がつながるお手伝いも始めました。孤立している地域の親子、共働きの親子も孤立しがちです。そういう方たちが、洋服やら食べ物やらいろんな体験、こういうイベントなどの有機的な繋がりを通して、子どもと地域がつながる。そうすると、地域の方がお節介になって、その子どものニーズに合わせて、居場所とかいろんなところにつなぐ。その活動を企業や大学生が応援する。こんなふうなお節介の輪が広がっているところです。

そして、いま豊島区にはいろんな居場所やら、テーマ別のネットワークがあります。それぞれ定期的な連絡会を行政とか社協も含めて作っています。しかし、困難な子どもたちは「こういうところがあるから行きなよ」と言っても、行きません。ですので、隣人のお節介さんがこういう居場所やら、人やら、場に繋ぐというようなことができつつあります。さらに、子どもだけではなくて「このポンチ絵にある全ての人たちに、こういうネットワークができたらいいいよね」ということで、いま「としま包摂ネットワーク」という、全ての人を包摂するネットワークまでできてきました。本当に、どんどんみんながお節介になっていきました。

最後に、私は先ほど民生委員と言いましたが、年に一度小・中学校を訪問し、校長先生と意見交換をします。2022年コロナが始まって3年目ぐらいに、ある校長先生から「不登校が激増して、いま大変な状況です。もう教員だけでは課題を抱きれない」という声を聞きました。これまで居場所の活動で、子どもや親の声を聞いて「ほっとけなくなった」のですが、今度は校長先生の声聞いて、何かできないかなと思いました。

そして、学校の中に居場所を作りました。先ほどの話にあった「ぴっかりカフェ」は、コロナ前にボランティアで行ったことがありまして、西東京市の中学校の居場所のことも知っていました。そういう引き出しがあったので、不登校児童生徒が増えて先生だけでは抱えられない。では、どういう形でサポートできるかなという時に、学校の中に居場所を作りたいということ教育委員会に提案しました。

その後、具体的に不登校の子どもが来なくなる居場所づくりを学校と相談しましたが、校長先生は子どもたちに勉強させたい様子でした。そこで、西東京市の放課後カフェをやっている方に来ていただいて、まずは「勉強ではなくて、子どもがリラックス、自分らしくいられるこんな場所を作しましょうよ」というイメージの共有にも時間がかかりました。

具体的に校内の居場所の設えには、リサイクル店から絨毯をもらってきたり、地域から要らないものをもらったりして準備を進めました。しかし中学校の先生のほぼ全員から反対の声があがりました。「仕事が増える。子どもの安全管理は誰がやるのか？」そのため校長先生は「GO」したいけれども、できない状況になってしまいました。もう「日時を決めてテーブルカットするしかない」という状況になって、中学校の居場所を強行スタートしたという経緯があります。行政がプレスリリースを出したので、東京都の取材も来て、ここが始まっちゃったという状況でした。しかし、やってみたら生徒が楽しそうに

している。その後、先生たちの意識も少しずつ変わっていきました。

いろんな方たちがテープカットで最初に知っていただくことによって、この場所に「イケアさんが、子どもの声を聞きながら家具を提供しましょう」という声をかけてくださり、子どもたちとワークショップをしました。子どもたちの「寝転がりたい。もうちょっと休みたい。リラックスしたい」、そんな声を聞きてイケアさんが全部、この場に必要家具をプレゼントしてくれました。

この中学校は、空き教室がないのです。場所がないので、最初は図書室とか家庭科室を提案したのです。しかし、学校の先生が反対しているので、到底そうした場所は使えません。ということで、玄関向かいのメモリアルスペースを使うことになりました。実は、棚の中には賞状とかトロフィーとか、学校臭いものがいっぱい置いてあるのです。なので、毎回それらを全部目隠して、スタートしました。

最初は週に1回だったところ、生徒から「一日だと部活で自分が行けないから他の日もやってほしい」などの要望があり、今は週に2～3回運営しています。ここで麦茶を出すのも、最初は大反対でした。

熱中症予防という口実で、最初は麦茶を出していました。副校長も校長も、どうやったら先生たちの「学校とは、こうあるべき！」を変えていけるかということで、「何をやっても、ハレーションは起こるのですよ。やっちゃいましょう」みたいな感じで始め、今ではカルピスも出せるようになりました。

先生からの反対は、来ませんでした。こうやって、私たちもいろんな声から、地域を豊かに強く変えていこうとしています。

そうした中、最後は子ども家庭庁ができ、子ども基本法ができ、子どもは「保護の客体から権利の主体へ」というふうに、法律の中でも定められています。しかし、学校はまだまだ“教えて育てよう”としている教員がいっぱいいますよね。地域も、子どもはこうさせる。つまり、保護の客体意識がまだまだ根深いかなと思います。

でも、子どもの「声にならない声」を聞く。そして、子どもたちのその声を応援する大人は、子どもが学んで育つものなのだ。こういう意識を、私たち、地域から、変えていけたらいいなと思っています。「子どもの権利条例」、いま色んなところに出ています。特に4つが大切にされています、聞かれる権利、子どもの意見表明、これを尊重できるような居場所が広がることによって、学校も「子どもは学んで育つもの」なのだというふうに思えると、先生は少し楽になって、笑顔になって、学校が楽しい場所になって、不登校が減るといいなと思って活動しています。

